あなたがいる。
看護の未来が動く。

看護を目指すあなたの可能性を、
広げる、高める。

5月12日は
看護の日

2025年度

「忘れられない看護エピソード」
～いのちをまもり、支えるプロフェッショナル～

生きるを、ともに、つくる。

公益社団法人 日本看護協会

はじめに

5月12日は「看護の日」です。
毎年、この日を中心に、厚生労働省と日本看護協会は
「看護の心をみんなの心に」をメインテーマとして、
全国各地でさまざまな事業を行っています。

「看護の日・看護週間」事業で行ってきた
「忘れられない看護エピソード」募集では
「いのちをまもり、支えるプロフェッショナル」と題し、
現場で働く看護職の皆さまから日々実践している
看護のプロフェッショナルとしての専門性や魅力を、
次世代を担う若い方々に伝えるエピソードを募集しました。
ご応募いただきましたたくさんのエピソードの中から、
受賞した3作品をご紹介いたします。

看護にまつわるエピソードが、
若い方々に看護の魅力を伝え、
将来、看護の道を目指すきっかけとなれば幸いです。

公益社団法人 日本看護協会

最優秀賞に選ばれた作品「黒い食器の魔法」が
アニメーション化されました！
作品は、日本看護協会ホームページより視聴いただけます。

「“病気を抱えながら家で過ごすこと”を支える訪問看護」

受賞者：葉山 香里さん

私が訪問看護ステーションを立ち上げてから2年目の年末、新規の訪問看護の依頼があった。Tさんは神経難病を患った50代の男性。気管切開と胃ろうを造設され、自分ではほとんど身体を動かすことができない状態。急な発症であったが、入院も長期となり病状も安定してきたため、奥様が退院を希望していた。

病院での退院前カンファレンスで担当ケアマネージャーが「自宅への退院は難しいのでは?」と言ったため、なぜそんなことを言うのだろう?と思い、早速「私のステーションは年末年始も訪問しますし、何も問題ないです!」と提案し、退院の方向へ話が進んでいった。

それからは、訪問診療への依頼、介護ベッドの導入、吸引器の準備とスムーズに進み、無事に12月30日に退院となった。そして、お正月を迎える前には入浴は欠かせないということで、退院翌日に訪問入浴による入浴ができた。Tさんは病気により表情は乏しく表情ははっきり読み取れなかったが、奥様は非常に喜んでくれて、私も訪問看護をやっていて本当に良かった!と思った瞬間であった。

Tさんの在宅での看護目標は、呼吸状態を悪化させないことと、奥様の介護負担を減らすことである。週4回訪問し、呼吸補助や端座位などの呼吸ケアを行った。痰が多くなると吸引の回数も増えて、奥様の介護負担が増えてしまうからだ。次に重要なのは、排便の介助で、訪問時にできるだけ排便を促した。

Tさんのケアは、訪問診療の医師やケアマネージャー、訪問入浴や福祉用具のスタッフと連携を取りながら行った。その間、肺炎を起こすこともなく、体調もおおむね安定して10年以上在宅で過ごすことができた。のちに待望のお孫さんも生まれて、Tさんを囲んで、家族の写真も撮ることができた。

病気を抱えた方が家で過ごすためには病状が安定していることが重要で、その役割を担うのが訪問看護だと考えている。

内館牧子賞

「最期の食事」

受賞者：神田 直孝さん

医師であれ看護師であれ、医療従事者も患者と同じ生活を営む「人」であることに変わりはないが、病院の中では〝日常〟という感性が鈍くなりがちである。患者は病気を抱えている「人」であり、生活を営んでいた「人」という視点で〝日常〟の大切さを考えるきっかけとなった15年前の出会いがある。

Aさんは70代の男性で、脳梗塞や認知症を患い入院していた。かつて大手企業で幹部を務め、お子さんを3人も育て上げたことを誇らしく話されており、奥様も毎日面会に訪れるような仲むつまじい家族だ。Aさんは食事の時間を何よりも楽しみにしていたが、疾患により嚥下機能が徐々に低下し、ある朝窒息しかけるほどの誤嚥をして、主治医から「次に誤嚥性肺炎を起こせば、助かる見込みはないから非経口摂取の経管栄養に切り替えよう」と指示があった。我々看護チームはAさんにとって大好きな食事を奪ってしまうことに複雑な想いがあり、Aさんの人生最期の食事が、今日の朝食であったと告げるのは残酷ではないかと胸が痛んだ。

「本人に告げた上であと1食食べてもらいたい。看護師としての役割は、その1食を安全に提供することではないか」

私たちの相談に主治医は強い拒否を示したが、1時間以上意見交換し、本人とご家族の意思であればと許可をしてくれた。連絡を受けて来院したご家族と共にAさんは医師からの説明を聞き、非経口摂取にすることを同意された。

奥様はAさんの大好きだった煮物などをテーブルに置ききれないほど沢山作ってきて、駆け付けた3人のお子さんと一緒に食卓を囲んだ。Aさんはご家族の思い出話を聞きながら「美味しい。美味しいよ」と小さな口を精いっぱい開けて手料理を召し上がり、涙を流していた。昼時の病棟のホールで温かい日差しの中、何十年ぶりかのだんらんがそこにはあった。

「人」の人生に関わる看護師として〝日常〟を忘れず、患者と関わることの大切さと尊さを教えてもらった出来事だった。

「黒い食器の魔法」

受賞者：福田 良美さん

摂食・嚥下障害看護の認定看護師になって5年目の春に、忘れられない患者さんと出会った。Aさんは80代女性、既往に認知症があり原因不明の下痢と重度の脱水で入院された。肺炎を併発しており誤嚥性肺炎の疑いがあった。点滴が開始され脱水は徐々に改善、呼吸状態も安定し嚥下機能の評価のため認定看護師である自分に依頼があった。嚥下機能は維持されていたため飲水と嚥下食を開始した。上肢の動きは可能なためAさん自身で摂取を促したが自分では摂取せず、介助すれば10分ほどで全量摂取が可能であった。

そんな日々が続いたため私はAさんが自分で食べようとしている姿を後ろから30分観察してみた。するとAさんが白い食器に入っているお粥をずっとスプーンでつついている事に気付いた。Aさんはお粥が白色のため食器と同化し、食事として認識しにくいのではないかと考え、お粥の食器を栄養部に依頼し黒色に変えてもらった。お粥を黒色の食器に移してみると魔法がかかったかのようにAさん自身でお粥を摂取することができた。その後、病棟看護師と協力し合い黒い食器に毎食お粥を移し替えることで、副食含め積極的に食事が摂取できるようになっていった。食形態を常食まで変更することができ、長く続いていた水様便も落ち着き、最初は施設入所予定であったが自宅退院を迎えることができた。

退院近くにAさんの顔を見にいくと「あんたには良くお風呂にいれてもらった。ありがとう」とお礼を言われた。自分は食事の場面でしかAさんと関わっていないので不思議な感じがしたが、あとから考えると水様便が不快で、よくオムツに手を入れてしまっていたため、食事の前後に洗面所に一緒に行って手を洗っていたことを覚えていてくれたのだと思った。きっかけは黒い食器に変えたことではあるが、Aさんの力で回復を促すことができた関りであり、今も元気に外来に通うAさんを心から嬉しく思っている。

5月12日は

看護の日

https://www.nurse.or.jp/

看護の日

【主　催】 厚生労働省 / 日本看護協会

【後　　援】 文部科学省／日本医師会／日本歯科医師会／日本薬剤師会／全国社会福祉協議会／日本病院会／全日本病院協会／日本医療法人協会／日本精神科病院協会／全国自治体病院協議会／日本助産師会／日本精神科看護協会／日本訪問看護財団／全国訪問看護事業協会／全国老人保健施設協会／全国老人福祉施設協議会／日本労働組合総連合会／ささえあい医療人権センターCOML

【協　　賛】 テルモ（株）／東洋羽毛工業（株）／ナガイレーベン（株）／パラマウントベッドホールディングス（株）